

國東南アジア研究の最良の部分の構成することも信じて疑わない。またさらに、この諸國の文化パターン分析に根ざした方法論は、世界システム論と社會史、機能主義と現象學に二極分解しかねないわが國歴史學のはやりの傾向に對し、新鮮な一石を投ずることも信じてやまない。

一九八四年三月 東京 東京大學出版會

A 5版 二三五頁 二八〇〇圓

## 山内昌之著

### オスマン帝國とエジプト

——一八六六―六七クレタ出兵の政治史的研究——

濱田正美

歴史研究が史料の上に構築さるべきものであるからには、その史料は出来得る限り、「文書、即ち日々の生活の明確な要求に的確に應じる爲に作り置かれた真正の記録」(T. Sauer)に求めらるべきことは言うまでもない。オスマン史研究者にとっての幸運は、その對象がイスラム圏では例外的に多量の文書に恵まれていることであり、同時に我が國のオスマン史研究者の不運は、それらの文書に餘りにも近寄り難い(彼我の地理的なへだたりという意味でも、古文書研究に必要な基礎的訓練の機會を見出し難いという意味でも)ことであつた。しかし、十年來その困難は徐々に克服されつつあ

り、例えば我々は既に『*Muhsin-zâde Mehmet Paşa ve Asyâhik Müssesezi*』Tokyo, 1976. を始めとする永田雄三氏の一連の業績を持つてゐる。ここに取り上げる山内氏の近著は、我が國の研究者により日本語で著された、オスマン語文書を扱った最初のモノグラフであり、我が國のオスマン史研究に一期を劃す記念碑的業績である。歴大な文献を博搜して成つた前著『現代のイスラム』に續き、一轉文書の海に遊弋して、行くところ可ならざるは無き研鑽と精勵を示された著者に對し深い敬意を捧げるものである。

ところで山内氏は、この著書に「研究史と問題設定」「本書の構成と史料」という節を設け(序章第二、三節)、本書が研究史上に占める位置及び各章の梗概とその敘述の意圖を簡明的確に述べることに、怠惰な書評者が概略を記してその責めを塞ぐ道を豫め鎖してしまわれた。それ故以下では、單なる内容の紹介は出来る限り避け、文書史料の轉寫と翻譯の問題を中心に、私の感想と意見を率直に述べていきたい。餘りに細かな問題のみをあげつらうことになるかも知れぬが、豫め著者並びに讀者諸氏の御寛恕を願う次第である。

本書の冒頭に於いて、著者はその課題を以下の如くに明確に規定されている。即ち「本書の主要な關心は、ムハンマド・アリー王朝のエジプトによるオスマン帝國支配からの分離プロセスを一八六六―六七クレタ革命との關連で位置づける點にある。その際、われわれが留意したのはエジプトの分離と自立のプロセスを中東もしくはオスマン帝國の内部からの視點で扱うことであつた」(二頁)更に又「本書の限定された目的は、(中略)エジプトによるクレタ出兵の經過と實態を明らかにしながら、エジプト近代史とトルコ近

代史の兩研究分野において十二分に整理されていないイスマーイールの出兵の動機と性格をエジプトとオスマン帝國の政治關係を軸に位置づけることである。」即ちクレタ出兵問題を、オスマン帝國からのエジプトの分離というより大きな歴史的枠組の中で内部からの視點から考察しようとするのが本書の立場であり、それ自體には何ら閒然するところはない。しかし、從來の「東方問題と呼ばれる視點と關心」に對し、内部からの視點の確立を急ぐ餘り、「近代ヨーロッパの東方認識を形成した西歐的バースペクチュに立脚するなら、一三世紀から一七世紀にかけて（中略）ヨーロッパ人たちがオスマン帝國の内政を評價する機會はまずなかった」のであり、わずかにナポレオンのエジプト遠征とギリシャ獨立戰爭への介入が「ヨーロッパ中心史觀に踰越していた觀察者たちに對して帝國の國內事情にも注意を向けさせる契機となつたにすぎない」と斷定されるのには、疑問を感じずにはおれない。「東方問題、オスマンの衰退、（ヨーロッパの）病人、野蠻、壓制は、しばしば餘りにも多くの過去の我々の教科書のライト・モチーフであつた。それらの教科書が言い落していたことは、我々のルネッサンスの時代にオスマン帝國は、その軍事力、その國民の（帝國への）愛着、その行政組織そしてその文明によつてさえ、帝國を訪れたヨーロッパ人に賞讃を餘儀なくさせており、帝國と鬪つたものもそれを尊敬していたという事實である。」（J. Sauvage）西歐は、*Pétite la Croix* 以下の東洋學者や *Lady Montagu* の如き共感的觀察者をも持ったのである。東方問題的關心の有り様は、まさしく東方問題の發生に即應したものではなかつたらうか。

著者が設定された課題のうち、クレタ出兵の經緯とイスマーイール

ルの出兵の動機と性格は、本書に於いて見事に解明されている。著者がカイロの國立公文書館で發見された膨大な文書群に基づく敘述は壓巻というより外ない。が『オスマン帝國とエジプト』という本書の表題にも關連して、以下の點を指摘しておきたい。即ち、本書に於ては、エジプト側の政策決定の過程は見事に明らかにされているが、同様のことはオスマン側については必ずしも明かでなく、又エジプト側關係者については個々にその活動を知り得るが、オスマン側は餘りにもアノニマスであるという點である。こうしたことは、本書がエジプト側の文書に基づくものである以上當然のことではあるが、例えば、著者も一部引用されている（但し本文からのみ）A. F. Türkeldi, *Mesâî-i mühlime-i syâsiyye*, III. Cilt に附録として移録されている史料のうちクレタ關連の八點（その多くは、エジプトのクレタ撤兵以後のものではあるが）について檢討すれば、オスマン帝國のクレタ問題に對する態度をオスマン側の史料によつて記述することは不十分乍らも可能であつた筈である。本書で明らかにされたオスマン・エジプト關係は、基本的にエジプト側から見たものであり、それ故に『オスマン帝國とエジプト』という表題には聊かの違和感を持たざるを得ない。又、本書の構成に關連して言えば、クレタ出兵問題をオスマン帝國からのエジプトの離脱の過程のうちに位置づける仕組としての第一章と終章のうち、第一章はムハンマド・アリー家の政治史の概説としても極めて秀れたものであるが、これと比較すると終章は聊か手薄の感を免れない。殊に、事實上の獨立達成を意味したといわれる一八七三年のフェルマイン獲得の事情については、いまだ少し詳しい言及が望まれる。しかし以上のことは、いずれも望蜀の言に屬するものであつて、聊かも

本書の價值を損うものではない。本書の眞面目はあくまでも、文書史料に基づきクレタ出兵の経緯を説明した點に存するからである。

次にオスマン語文書史料の轉寫と翻譯について私見を述べたい。

(文書史料からの龐大な引用のうち、著者は、オスマン語文書の「重要と考えられる」ものに限って原文のラテン文字轉寫を示し、アラブ語・フランス語の文書については大方省略しておられる。一讀したところでは、原文の呈示は本書の前半に多く、後に行くほど少なくなるようである。) 先ず、轉寫については、全般的に以下の點が指摘できる。(1) *izâfet* が屢々脱落している。(2) アラブ語からの借用語中の *î* は總て「平らな *î*」である。従って、語末の *î* に後續する接尾辭の母音は、先行する母音の如何に拘らず前母音でなければならない。(3) 語末もしくは音節末の二重子音としては、トルコ語は限られた組合せのものしか許容せず、それ以外の場合には母音を介在させるが、當該の語が母音で始まる接尾辭に後續されるときは、介在母音は消滅する。本書の轉寫ではこの法則が誤って擴大適用され、本來介在母音ではない最終音節の *î* が脱落している。(例えは *‘asâkiri* / *‘asâkiri* の如く。)(4) オスマン語に於けるアラブ語慣用句は格語尾を伴った形で發音される。(例えは *müsâr-ileyh* ではなく *müsârdn-ileyh*) (5) *î* の同義語の間の接續詞は「ハニシヤ語風に *ü* 母音に後續する場合は *vu* (但し母音調和あり)」と讀むのが一般的である。次に、第三・四章からいくつかの具體例を取って、著者の翻譯を検討したい。ラテン文字轉寫中の括弧内は評者が想定した訂正である。但し脱落している *izâfet* は單に括弧をもつて補つてある。翻譯 A は著者の譯、評者の試譯は B で示す。

一五七頁。注(5)。途中から。

... hemân en güç mevki' kangisi ise Mısır 'askerine ihâlâ ve hafif olan mevki'lerde Türk 'askerini dağıtmanız daha evvelâdır A「たとえ最も困難を極める場所がどこであらうと、エジプト兵に割り當てられる場所にトルコ兵を分散させないことが肝要である。」 B「最も困難な地方がどこであれ、ただちに(それを)エジプト軍に割り當て、輕易な地方にあって(も)あなた方がトルコ軍を分散させぬことが一層の良策であります。」アラブ語動名詞 *ihâlâ* はトルコ語動名詞と並列に置かれているのであって、*olan* に續くのではない。又 A では *hafif* が譯されていない。

一六〇頁。注(15)。これは巻頭の史料寫眞(史料2)と翻譯、轉寫の三者すべてが示されている唯一の例である。

orada bulunan fakir ve fukarâlarına ve kâtili (kâtûlik) ve rûm kiliseleriyile isbâtîyelerine ve hatâ yahûdîlerin (yahûdîlerin) fukarâlarına ziyâdesiyle kendim bânefesi (bâ-nefis) gezerek ve her birisinin mâ'bedinde birer kahve içerek ve lâzım olan tasaddukâtı vererek ve bize gelen kûnslûsların vizitelerine girmek ve bundan mâ'adâ (mâ'adâ) çadırımıza kadar gelen ve yolda (velîlîlere?) memleketi giderken her milelinden sâğıu ve solu tûran (dûran) fukarâlara efendimizin se'nine (sa'nına) yakış dırır (yaksur) bir takım tasaddukâtı içrâ etikensoura gerek zillet (zelle)-i Hıdıvî(-i) â'zam (â'zam) efendimizin ve gerek Mısır mevki'i burada ki Avrûpaluların ve müsîlmân ve hıristiyanların 'indinde başkaca göründü ve'l-î-hasil burada sâye-i velî-ül-Nî'emîn (Nî'anda) bendenize etikleri ta'zîm ve (û) ihtirâmî (ihirâm) Valî Paşa Hazretlerine emniyetler

A「私はクレタの貧民たち、カトリックとギリシヤ正教徒の教會や

病院さらにユダヤ教徒の貧民たちに過分の慈善を施した。各々の宗教施設でその都度コーヒーを飲み、必要な義捐金を與えた。我々のもとに來た領事たちの答禮訪問に出掛けた以外に、我々の幕舎まで來たものであれ、道すがら出會つた者であれ、ムスリムとキリスト教徒たるを問はずあらゆる宗教共同體の貧民たちに殿下の恩恵を忝なくさせている。大量の義捐金を施した後になると、當地のヨーロッパ人、ムスリム、キリスト教徒住民は殿下やエジプトの立場を「オスマン帝國とは」幾分眞實なものとして見るようになった。換言すれば、彼らは殿下の僕たる私に拂つた尊敬をクレタのヴァーリーには拂っていない。」

B「そこに居た貧民たちに對し、又カトリックとギリシヤ正教の教會と病院、更には又ユダヤ人の貧民に對して、私自身屢々訪れてはすべての寺院で一杯ずつのコーヒーを飲み、必要な喜捨を與えまして。又我々のところに來た領事たちの訪問に出かけました。この外我々の幕舎にまでやつて來た（貧民）と、町へ行く際に道の左右に居たすべてのミシレットの貧民に殿下の御威光に適しい若干の喜捨を施しました（こうしたことの後では、偉大なるヘディヴ殿下の御仁慈の（立場）はた又エジプトの立場は、當地のヨーロッパ人、ムスリム、キリスト教徒の側で、幾分異つて見られるようになります。要するに、當地では幸運なるヴェリー殿下の御恩澤により奴才めに示す尊敬を（クレタの）總督殿下には示しておりません。」

引用文冒頭の *orada* を著者は意を汲んで「クレタ」と解しておられるようであるが、若干問題がある。即ち、指示代名詞 *o* は先に言及された事柄を指示するのが一般的であり、この場合も同様である。引用に先立つ部分を史料 2 の寫眞で見ると、

ve bundan ma'ada bendenizin geldiğin günden-berü gerek konsololar ile gerek ahâlî ve a'yân-ı müslimine ve gerek ahâlî ve a'yân-ı hristiyanê ve 'ulemâ ve pâpâzlara ve bî-tahas sâye-i hudûs-ı a'zamide mahall-i ma'âbidî gezüp

「又この外、奴才が到着致しました日以来、時には領事たちとともに、ムスリムの住民と有力者、キリスト教徒の住民と有力者、ウレマーと教父たち及び殊に偉大なるヘディヴ殿下の御恩澤により寺院の（在る）場所を訪れ」とあつて、以下の *orada* が、mahall-i ma'âbid を受けてゐることは明らかである。「クレタ」と解しても誤りとは言い切れぬが、少くとも慎重さには欠ける。著者が *ve yolda* と讀まれた語を、もし *velidlere* と讀み得るなら「幕舎にまでやつて來た少年たち」との意になる。

一六九頁。注(44)。

kabûl olundûğu hâlde cezîrenin Mısır idâresine ihâlesine Hâk-pây (Hâk-i pây-i) Hazret(-i) Şâhâden istid'â ve (vu) isrinâm edceklerini 'alennan ifâde eylediklerinde müşâr-ileyh (müşârin-ileyh) Mısr'dan gelen 'asâkrin ('asâkrin) idâresine me'mûr olup başka bir şey-i (seye?) karşımağa (karşımağa) me'mûriyeti (me'mûriyeti) olmadığın ve böyle işlere girişmeyeceğini kendülerine ifâde ve tefhim etmesiyile

A「住民たちは、エジプトに差し支えなければクレタ島のエジプト支配への移管をスルターン陛下に懇願すると公けに述べた。これに對して當方は、『エジプト兵は行政にあたるために來たわけではない。それは思いもよらぬ任務になる。このような事態には兵を關與させられない。』と説明して理解させた。」

B「許諾される場合には、島のエジプト支配への併合を皇帝陛下の足下に懇願するであらうと公に表明した際に、上述の者は、エジプトから来た兵士たちの指揮に任じられているのであり、他の事に關する任にないこと、又このような問題には（將來も）關與出來ぬことを彼らに説明し……」

me'nûr olup の主語を取り違えた上なお論理の筋を通そうとした爲、肯定文を否定文にするという誤譯が發生したと思われる。これ以下の意味上の主語は總て「上述の者」即ちクレタ派遣軍司令官「ハーローン」である。olmadığını, grışmeyeceğini と過去・現在形と未來形を對比させて、現在その任になく、將來も關與出來ないと述べている點に留意し、譯すべきである。

二一九頁。注(23)。

Girdim her bir tarafı cebeliklik ve dağlık taşlık ve dere tepe ve yollar dâr ve bi-intizam olup sâ'ir cihetlerin hayvanları dahi su'ûbet ve meşekkatiâ (meşakkatîlâ) işlebiyor (işleyebiylor) hususan Abukarın hâbiyesi (nâhiyesi) ve mücâvir-i (mücâvir-i?) istifâkie kısmı cân'b-ı (cân'b-i) şarkısında olan Lâkız ve Silhe nâhiyeleri pek fena yüce dağlı ve dere tepe ve ekser yerlerinin yollarından birer birer katâr hey'etinde murûr (mürûr) edilebiyor

A「クレタの全地方は山また山である。しかも石だらけで起伏もなげしい。道路は狭く、舗装もされていな。クレタ地方以外の馬匹はようやくのおもいで體を動かすことが出来る。とりわけアポロナ郷とその隣りのスフフィア地方の東側のラコス郷とセリノ郷にいたつては深山幽谷である。その場所にある殆んど道は、荷馬車

で一臺一臺からうじて通過できるに過ぎない。」

bi-intizam は未舗装ではなく、未整備。katâr の意味は單に「列」である。勿論荷馬車の列も katâr であるが、本書二一八頁注(57)にも「大砲四門と残りの彈藥をラバに駄載した」とあるのを見れば、ここでは、(人馬が)一列ついでしか通れないと解するべきであらう。dere tepe を一度は「起伏もはげしい」と譯し、今一度は「深山幽谷」とされるのにも、これは半分は趣味の問題ではあるが、やや抵抗を覺える。殊に問題なのは hususan 以下で、原史料を見ぬ以上何とも言えぬが、著者の譯の如く「アポロナ郷とその隣りのスフフィア地方……」であるならば、轉寫中の mücâvir の後の i は izâfet でなく possessif でなければならぬ。轉寫の方が正しい場合には、「アポロナ郷、及びスフフィアの隣りの地方の東部にあスラコス郷とセリノ郷」となる。本書表紙裏の地圖によれば、ラコスとギリノはスフフィアの西に位置してあり、後者の理解の方が正しいであらう。

二一九頁。注(23)。

böyle ahalının (ahâlinin) tagyânı (tuğyânı) esnâsında muntazam 'asker ile devr etmek ve cümle geçirmek ziyâde meşakkatîlâ bogazların tepelerini zabt ve muhâfâza (muhâfâza) etmedikçe ihmâl (ahmâl) ve (û) eskal geçirilmesi mümkün olmadığı gibi ahalısı (ahâlîsi) dahi kuvvetli 'askerin kabâline (kubâlesine?) kat'an durmayup hemân sarf yerlerden eliger almışar matârislar yapup cemâ'at cemâ'at durarak 'askerin alrı (âhri) alınmasıyla berâber 'asâkrin ('asâkirin) arkasına ta'âkub (ta'akub) ederek kurşun endahına cür'et ederler oldukları mahalle 'asker hücum

ettikce durmayup taştan taşta fırâr ederler ‘asker dünmesiyile berâber yine ta ‘âkub (ta ‘âkub) emeden ferâğat (ferâğat) etmezler  
A 「住民の騷擾期間中に正規軍の一團が通過するには多くの困難がある。峠の頂きを確保できなければ荷駄や大行李の通過は不可能である。同様に、住民側も強力な軍の任務を完全に阻げることは出来ない。けわしい場所を選んで五〇ずつ六〇ずつの塹壕をつくって集團ごとに集まるのが常である。兵隊の後尾を押えると同時に背後にまわりこんで果敢に銃撃する。兵が彼らのいる場所を攻撃すると支えきれずに岩から岩つたいに逃走する。兵士が撤退するとまた後尾を追いかける。彼らは退却などほしない。」

B 「かかる住民の反亂の際に正規軍と共に移動し、總てが通過するには、多くの困難によって峠の頂きを占領、防衛せぬうちには、輜重を通過させることは不可能である。更にその上、住民は強力な軍隊の前面には決して留まらず、ただ峻嶒な場所に五、六〇ずつ防柵を作り群をなして、軍隊の後尾を捕えると同時に兵士たちの背後を追尾し、果敢に發砲する。彼らの居る場所を軍隊が攻撃するや否や、留まらずに岩から岩へと逃亡する。軍隊が戻ると共に、再び追跡せずして斷念することはない。」

A で「任務」とされている kabâl という語は、評者の持つ如何なる辭書にも見出せなかった。評者の想定した形が誤りであっても、この語がアラブ語 qabla の派生語であることはほぼ確實であろう。いずれにしても dur- は自動詞であつて、「阻げる」とか「支える」という意味にはならない。matâris はヘルシヤ語 matars の訛語であらうが、Redhouse, Lexicon は a stockade, barricade, or an trenchment としつゝ Develliğiün のオスマン語辭書では

savaşta, korunmak üzere yapılan toprak tümsek, siper として説明されてゐる。何より本書二二三頁では、フランス人目撃者の記録から、「トルコ軍が平地に野營していると彼らは山から降りて來て夜のあいだに、彼らがタブーリと呼ぶごく小さな砦のような防柵をつくる。」との引用があり、著者はそのものとギリシヤ語まで注記しておられる。matâris とこのタブーリが同じものであることは確實であり、著者がこれに氣づけなかつたのは輕率の感を免れない。

二二六頁。注(83)。

Âtina Cem'iyet-i İhtilâyesinin kararını üzerine pırvoltüleri'dârin (pırvoltüler tedarik?) olunup Giride sevk olunacaktır tedâbir-i ihtiyâyenin seri'an ithhâz buyurulması için keyfiyet 'arz ve (û) beyân kılınıd sefâ'in-i Devlet-i 'Alîyeye hiç bir gemi yanasırlımayup top endahıyla dormadığı hâlde bilâ-tereddüd garak ve şikest olunması ve sef-i (sûfün-i) icnebiyeye (ceñbiyeye) edilecek vezitenin (vizitenin) top menziline icrâsı lâzımeden görülmüşdür mülâhazât(-) 'âcizâne (âcizâne) 'arz ve (û) beyân olan gayret ve (û) icisârnek (icisârının) âfı buyurulmasını isirhâm ederim

A 「アテネの革命委員會の決定により砲手たち(пушечники)——山内補(が準備を整えてクレタに送られるはずである。クレタに送る豫備兵の選抜措置を迅速に實施するために當面必要な條件が明らかにされた。オスマン帝國の艦船に如何なる船舶も近寄せず威嚇砲撃によつても停船しなければならぬ撃沈すること、外國籍船舶に對しておこなう臨検も射程距離内で實施することが必要と考えられる。この件について御検討をお願いしたい。」

B「アテネの革命委員會の決定に基づき砲手たちが準備されクレタへ派遣されようとしております。警戒の諸方策の迅速なる御實施の爲の要件を上申致します。オスマン帝國の艦船に如何なる船も接舷させず、砲撃によって止まらぬ場合には、二念なく撃沈さるべきこと、又外國船に對して行われる臨檢は射程距離内で實施さるべきことが必要と存じます。愚考を上申致しましたる蠻勇をば御海容下さいますようお願い申し上げます。」

引用中の第二の文を、何故著者がこのように理解されたのか見當もつかない。或いは、*klindu* という過去形にくだられたのかも知れぬが、これは書翰文ではよく見かけることである。(こうした過去形の使用は、書き手にとっては未來に屬する行爲でも、讀み手には過去の行爲となる故であらうかと考えられる。) いずれにしても、*buyurul* が相手の行爲を尊んで言う言葉であり、*arz d beyân* が下から上への上申であることが理解されていれば、このような誤解は生じなかつたであらう。最後の文はなるほど極端に意譯すれば著者の譯文になるであらうが、それではオスマン語がオスマン語たる所以の、あの七面倒な禮讓を無視することになる。

以上非禮に互ることを恐れつつも、オスマン人ならざる評者は敢えて著者の翻譯を検討させていただいた。率直に言つて慎重さという點で缺ける點があることは否めないと思う。が、もし幸いにして評者の讀解が當つている場合があるとしても、それは所謂岡目八目というもので、著者の譯を下敷きにして始めて可能であつたということを附け加えておきたい。

許された紙數も盡きたので、氣にかかる若干の細かな疑問のうち一點のみを取り上げたい。巻頭の史料の *date* 「147. Ep. 34/3.

一八六七年五月一日附、在カイロ、イスマールより在イスตันบูล、ヌーバール宛電報四二號」の寫眞が示されているが、本文の注では(三七三頁、注(41))電報四二號のカルトン番號はA198となつている。更にこの注は三六七七八頁の「……アーリ・パシャのフェルマーン原案は、一八六七年五月一六日の閣僚會議の審議に附されて諒承されるはずであつた」という一文につけられているのであるが、評者が解讀し得た限りでは、電報四二號には、その冒頭に *D'après votre dépêche du n°48 d'hier le grand vézir doit vous donner la réponse et la décision définitive du conseil jeudi matin.* とある以外如何なる日附けに関する言及も見出せない。或いはこの注の附された場所が誤植であつて、本來は次の「ところが、閣議は五月一九日に延期された」という文につけられていたのであらうか。(確かに五月一九日は木曜であつた。)しかしその場合でも、右のフランス文から直ちに閣議の延期という結論を引きだせるであらうか。本書の「あとがき」によれば、著者は一九七八年一月から八〇年二月までカイロに滞在され、歸國後同年の一月末には本書の主要部分を書き上げられたとのことである。その迅速・精勵、まことに驚嘆の外はない。が敢えて無禮の言をお許し願うなら、その迅速が本書に若干の瑕瑾を残す原因ともなったのではあるまいか。「一八六六年のクレタ問題については如何なる言語によつても史料集が刊行されていない」(二八頁)現狀に鑑み、著者が収集された文書に更に若干の時間を割かれ重要な文書からなる史料集を編まれ、我が國の學會のみならず世界の學會を裨益されんことを願う次第である。

一九八四年五月 東京 東京大學出版會

A 5版 四三七頁 六八〇〇圓